滑稽

夢補譚

五編

下

へ13
3761
15

門へ13
號3761
卷15

夢助譚 五編下の巻

江戸 一筆菴戯作

又布屋

夢助、栗九郎の酒の酔ひくゝ見るれば酒樽の
呑口を抜くと思へば絶動して数通りのもんちやくとなりて
つゞを云いのせけれども浅日ちゞ酔ひ一ゑ思へ
ふを思ふ事ふさるべく酒一樽の代金をつくのふ
中くふるせぬ思へ僅の酒用ゐ給ふる金壱両壱分思へ
山場を主人吹上の主場を主人動ぶの栗やふ

彌「乗合客の泊りでもちが元文の悪い酒樽へ粉造さアおんまり文字と智恵のねへものを売てぞそりやア仕方がねへから上州までの路用をどうぞよろしう　東「どうも面目次第もねへことを売らずれんの出来心でつまらねへ金を取れて百日鬼に摩ふものだ　鬼「ごまのはいに盗まれたのだろうてんぐが仕て取れたのごうろうろ僧くしの　東「なんでも本庄宿はやくくるんでんでぎる路銭で我慢して行ふ　鬼「とてが入れぬと所で茶漬の名物だ　東「酒の所で一口呑んで急ふ　鬼「それじやア熊谷の和尚やご　トて天ハ

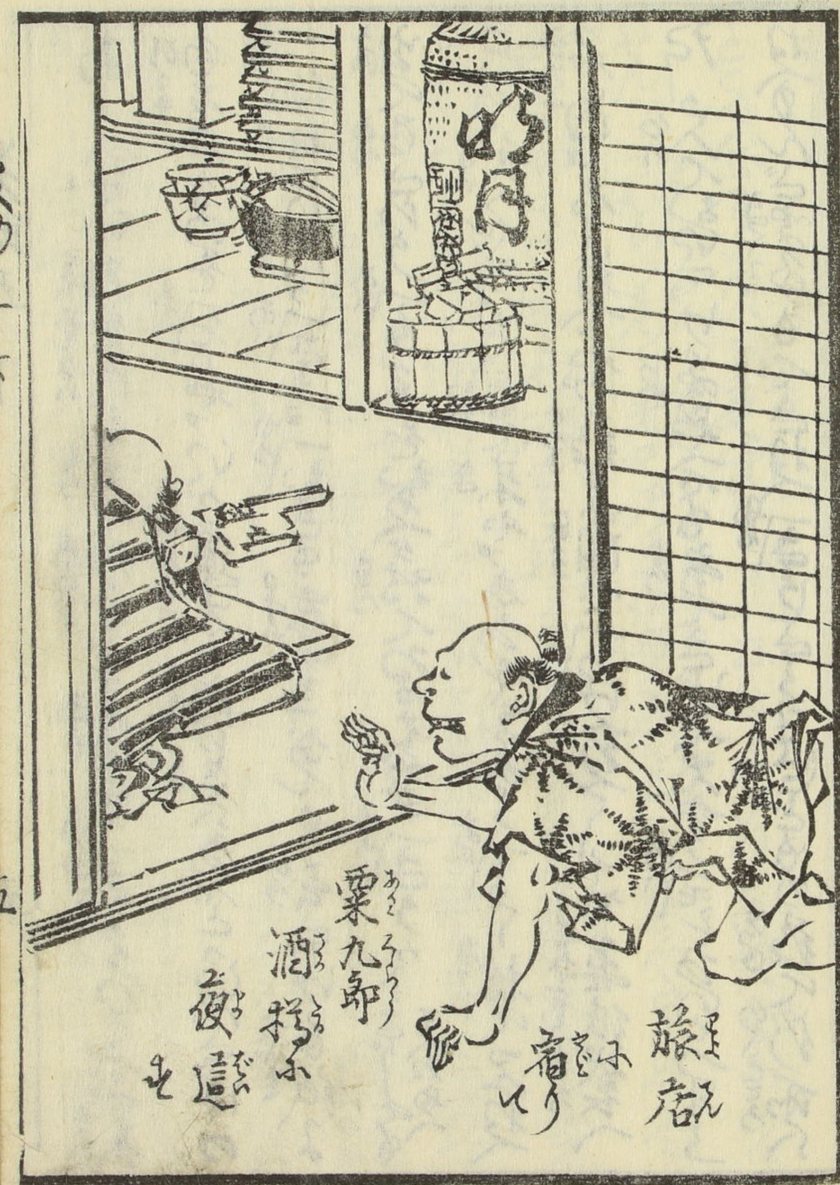
いそだしハわざわざくまがやの宿にてとまりてはやうやうとして酒をのミ蓮生もみずに泉せんと云ひ続く此宿の手造も絵る茶の詠によりてつけたりかわのまへハ熊谷の宿のまへ清き茶屋や八幡宮の辺にて寺の自然にて名物の小豆あんにて風味よく旅人をもとめてつゞけて此宿へ茶を出すよりぞ道中の名物をもとめて小豆なれば中山道第一の立場ゆへ旅人ハさそひて休らふ　東「さて茶漬の　鬼「さ酒も肴も残さず喰ふ　東「ヨトちとをきける　東「酒ハよしの吸がいで　鬼「うるさいでも仕方がねへ　トて支度をもちて名物をくひ　鬼「どうも茶ハよろしいぞ　東「此本山でも名物の茶漬を熊谷の和尚やも酒ハのんべの吹上の酒ハよっぽどよろしいさ　鬼「そのまゝぞア喜ぶ事分ら来てさものを挽きつゝ

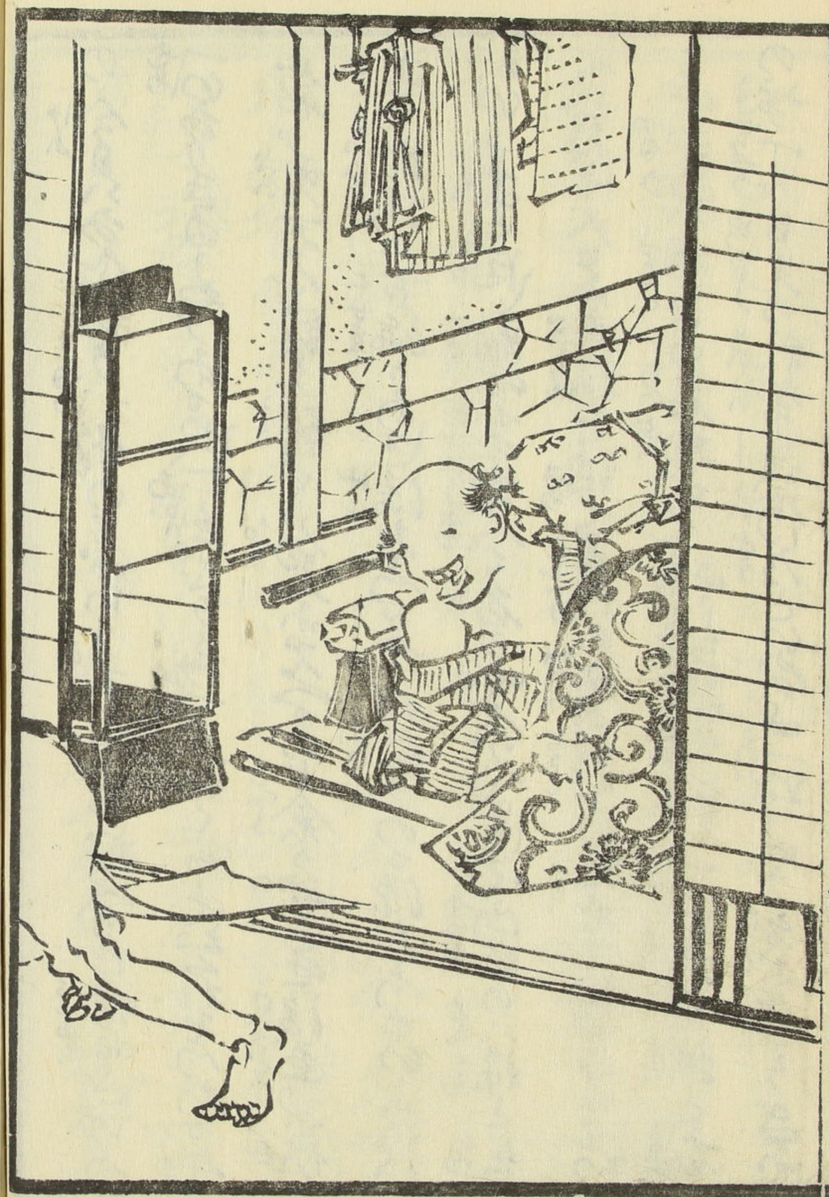
夜前ハ泊りのどうらいでハちやアつまらねへ「東 あさ宿より呑
酒つゞけでハなしねへ「米 夫といふ其暮といふ子がどうして好な酒を慕ふ
も無ひで上戸ハ其ま人ハ無理ハ客に合ぬといふ道徳の
用ひつゝ表へるといふ作用が来てでハ酒がてたのそりやこのきま
とらんとこいで「東 むかしのかるがんだんとこいふ白鳥の流ハこい
きやちが鳴からまへい「東 葛西の百姓衆んで来ハ「米 いゝとも尻
出もちやアもウ、お仕立てへいがまる来に塩で居る栗公も君と元気が出
て来て酒落が出れバもウ安心だ「東 きまでぞろ子志られとてハ一ぜや

見よふハ独いの四ツ手見て其後の座ハ別も茶漬でいきかづらひ迄
ぶ今朝の泊りハ膳んで是福エとモウ一文字ツ迄の売尻だぞ一所だ
のるかぶ楽浜ばあれなりの今朝さモかく林で済ごく「本庄へ
引ツバちんやとへさんべんが出来るら「もんと出来るおらの組の山家の女房
の兄きぶ本庄に古着屋をしてゐるア決を云て帰りまする
から二連木でえてて使てやッし返まちら「嘘ぶやア福エら一ぱ
本庄ごヨ「このとへ大笑ひ下こゝを立のでいそぐ程なく深谷の
ぐれおちくなりける迄よかかれ本ハ女房の兄なるふるぎやを尋ねとて出せしにようのさ
うくろ一歩やあんどの恩ひをなし其の良ありや女も其わハかぶ本の志るるハ一ぶ本とすまり

よく日光町宿
ゆゑのそぎたり「中」あハ爰での名物稲荷さまあるくとみな稲荷さま
ござりまするかの「東」名物じやでご丈夫やア女のお祝さまでござりまする「中」さうさ
酒も嫌ひだが女は先程からお侍の押しでもお役者るの小山利
やくのけうちに結び奉るがりて「東」たしかに左様なんだ「中」云ふ侍の泊
家にねる女中が左様達合が違うのサそれを押しでといふの房州の
弁といふ者のうち　ト清ハ首がらやく右の首の西の張や、名栗稲荷大明神の社あり花の丈八上州嶺から一州と
むきの「東」それやアちよと東ちう強者の当世ざ「中」さらんで笑ふ「東」ナゼ
きくいと「中」からきこみお土産ぞといふ「東」よくぞすいて居ますぜりやア、お神楽がゐる

の今日八幡ござらう「中」午の日ござらう「東」それじやア、おやへ五度縁日ごのふ
「中」いありさまじやアあるぞ「東」午ならうさ「中」よろしく中でおかれそうちが午
めやア天一天上ござらう初くる向ふにアるのが金が毘沙門遠く浅草寺さ
神の船橋の古跡がある源は此に仕汚るといふの八
い山幸古図細で金良人で名の高い人を以て山名の八幡と云
て八月十五日に大祇を納て参拝の虫のやくはらを売る八幡さまでの
る也山名八嶋表の名物でアトわざらさ香着へて「中」アノ嶋を親と右
の挨丁が日光の礼儀浅いことぶら「東」ねりやア富士が近がござる


栗九郎
酒拵ふ
夜這
旅宿
着り



あるいせいろ蕎麦を見て仕合ごと蕎麦
白蕎麦のを一そりやアいくが二連木の肉の名へんとらいさけの
伯母子の内ら一さうョ一ちきすると言ごとけ紙よ
出てきたあらう一ぶごまをもめくれてゐるたびご一さうハトさびて
こりゃ大へんごいろ〳〵来やアあんごろ〳〵一よう〳〵掘て見れば
名尚が来れば〳〵やアあるゝ困ぜ一ちげ〳〵ねイヤ紙袋へ
たゝえてもいごけ蕎やへでも書てきびてえやうモシあのとつまら
ねのんごゆるゆもできれば一きびとうとびるの残て行所へ

どでござりまんとうそのョ一イヤ串戯しやアねェとのハ言みあるゝ
せんごご一ちらアあ〳〵考てみるふ伯母さんハ上州やあんとと思ふが
夫とも言とけうもんん一つまら〳〵ねェるをいのぜ友まゞ来て大変るゐ
を言出さ一さ紙ゞ作様ござりびるを訪ぶと紙を出て見れハ
一反紙ゆハ爰助反上州二連木とうと〳〵言て名へるゐんとトきのて
おきれゆ一ちらアあ紙書図ちござ〳〵拾の漬ゆよもゐるもゐ名尚ょ〳〵ハ
きぶ付あんごゞ夫〳〵やアおごの名へあんとらふ知て居ござらう一ちら
さん〳〵とらうて居さるんござ〳〵名へ言ねェ一どうも沼ろうまく

おとうさんの知らぬ間でどこへまいりと言て飛ちやア上州中一合の
茶屋難で死ても知らきづらいあるご吉切姫の小病よりもづらーいせ
「さて」せつ迫やア長い長袖まざくく食ぶ空言侍板義安中一と
あざるがみちくく考ゆがくく行因由来長ひざ出るごらうモン長ひざ出さうも
あげりやア板義ふ磨の巣山とふ言へふの上ふ金見殿さまの歌
がある天ちくく天ると妙義の方ハ一眼ふ天つる百合若大臣射板の巣ごの
中の嶽ごのとふ天つくくマアまを天しさう行天尚ご知るごらうと長ふ
くうまづくふ考ゆ手ちねくく「イヤ」言ふの山くく石底ふ天さんさく

成程ふ手ちびの巣ふ天さのごやア臣行先ご天つるのちやアへと
さて何義とふ言ふんごア「とつハチトもれも尚ふのくちごア「酒
百のくちあくく服掘ふりごらうふ小判ふ仰て居るくく長んぎがく
「いづれゆ日今歌の油でようく考ゆ天ハナ「ユの油ハ今歌アごと
とまらう「菓の巣ふ行ふくく蔵のさ天サ「いふのふのふくく酒を
天ア雪ふふさう天天ごらうねちやアふれエ「安中酒とちくう「見
中でも病ごれでもいがゆ義まごハ行ゆくく「明日ぎちゆくとふ
やせう「ごくうもあくねエア国さのんごせあて元祖の服父の名

でもいつてもけつこうなのか「それぢや元御落世ハ俗ぞくれとしの
のごモシ御ぞんぜぬ御ぞんぜ御なるだりごろさきの国縁先の世の
龍のごとあるこうるのヨ「いまさつどうてあるくめくまるものう
アノ元御の紙ぶくろぢ喜てのんぢ地おふさんぢんハあるめくか
「きるのせの故ごと思つてゐるぢつ「そりやア年寄のうやぢうう堪
悪くてゐるぢつハサ「あるもの勉兵をどうとトいられ「ヤアかべの
泊ぢ思ものの如へものて来ご「それぢやアなりかるそうぢつトこのな
ふたりう存あるしのそて果ぢつ「思ひ出しとぢもぢごの国の名ハ正表ヨ「きうろ

赤わうつ「高麦ハ伝のご「国ぢ正表ハ正表ヨ「ナニサ高麦ヨ「
商ぢのうのうのうと待つとうぢのとうつ「それねエ「それぢろつ
赤うべのをぢのごすのヨ先ハめつてる二重木の二ぢぢのさんハこう
こぢどぢうやうぢうこうこう教わ「指ぢの八ぢのとうつて人の名ぢ呼ぶ
ものう「まこうる遠くトのハあハ九年「どうしよ高ぢ宮ぢ付
こうの風対ぢて風抱踊ぢやうぢのう「それぢでもぢ行わへくと
ふうつヨ「まちげくとこのヨ「半ぢの傍ぢの「そりやア市岩ぢ「市
岩うこ高遠う高れ私がどうぢ「やアねエ「こる法へ行

こゝ虎やど一様ゝきさど「あんど」「料理茶や」「虎やどやフ」

作ふ碑ごろう

作者伏菓堂より言法の町ふる虎屋の滑稽板

鼻毛中ぬ義山系ゐるとり中の嶽大鼻天へまこど奥の

滑稽岩屋のコ義赤村天猫丈ふ法ん」とてゐおまとも

山中ふ狂歌ゝ乃中の滑稽ゝ乃ゝ紙

昌ふ狂りあり狂文ふ下ゆの長法八巣寺他のうんと

今年大編ゝ義助漢結局ふ「れど義ふ書ゐ

義助栗九郎の天八ゆ弟ふ弟山の棒ふ乃ゝ二連

木とふ村を乃ゆけれども結て書ゐたゝゆあど

こゝ山乃を書ゐ八ゆけり

扨ゆ義助と栗九郎八ゆ弟山の棒ふ乃ゝ二連木とふの村を

宮ふ住ゐて乃れども仲者し村名ゆ記程ふ始と困ゐ果ゝ

うゐ義助ゐ宮を書ゐ乃ゝ賢く木の根ふ腐ゐ根ゝ「栗公

どうゆふ法ゐ二連木とふの村の根ゝ書ゐ乃ゆ

ものごろう「書ゐ乃ゝ」ゆ書ゐ乃ゝ遠ゆゆ乃ゝ書ゐて

見て〳〵目が覚さうなもの、傍へ来てゴロ〳〵ア早く起
き、男子が加をさんざん喜ばせ〳〵じゃアあるや〳〵「さんざん山ろを歩いて
げんなりしさ」酒屋も理ふ落て出ね〳〵トもう片ちを出して
むこうよりそばをちらてムきさうと三ツ目ぢ式ヒホをとり〳〵アたて義助と
あくみふをたるよりゆく〳〵こちらあ寺をるゆ三人ハこれをよくこれバろのひ
きやくふきさうしちやぢ
ありれればびつくりして「ちやハ江戸へ元御ふ来ゆきさん茶さん
じやアねエトのハるやぢ
ヤア義助どのハアよく来られま
さアこちらゞ且那方が待ゆて
ゐらゐまさアトゆバ「ヤ、ちやの
汐を迎らけて来きてゞさうろぞり「知れね〳〵で困きろて居さ

ところゞ見ごろうの花樹で伝ごるでく「どうも二連木と斗り見て名尚を忘さ拾ざる不用り中と「さうでハあんべサコーと同志ふ事ごろくござり中きア爰の山の四ア廻て巡るとあきハアコーしが来ごアトさいふ元ふ二人いかくのふとうびをえすびとくをたとうくもて山伝を三人打連立ふ九行事又六町多流とうて二形の事ふ家あり彼父爺ハ案内して内ありて義助栗九郎の二人をもぼこそ仕ハ入れバ二人ハつゞくと赤内の拵ふを見伝ふ惟家屋のごとく茅葺の小家あれバ奴婢もとうく共父爺獨住の躰あるゆへ

伯母の送金百文を渡さんと云ハ別ふ豪家あるゆゆゝ家ハ

見伝御ふ座ハ是爺の住家なるべと栗九郎ふ御事ハ解ざりけふ主の爺示して伝ふ

ふんこ爺る二人の来ハ必ず伝ふ事ハ

きたそんをたぎと云て畑の傍ふ休ふ者のべ一ぞて対面ふ

ふくふ方ふ云ふ

云ふて伝ふ不審ふ思ふ伝して是を渡ハ居躰の

そそふ居歩りて手ふ書伝を持る事ふ成る爺ハ被頭を押ふ

て伝方へ来ふ者と案内せ一べ爺る爺を伸ふ二人ハ

へるゝに大黄寺らんや美麗を尽せし座敷ありて銀燭を燃つらね
わらまで団九郎某ハ再び将枕として軽くむかひ二人付ゆへ
ゆとり二人ハ銀燭を夜ハ寄せて時遥ありて一より異香紛々と鼻
を貫きこゝろよく步行出ける八代家の主人と見ゆるの外悉く麦
助が抑留にあらて出現の上福禄寿星なりければ当時早々く
口を六波利まで低頭平身して居たりしが栗九郎ハ我体をかへて
俊に向ひてハ押へいふにとなひ居より当下福禄先生の福
貴き与助と与しとは汝七福神の仲ありて我を宗旨人なりと信り

抑禍の結ぶに至りされば視を五扨る者妙の術を授しつたび
視を奪ひ我てこの上を得る事をゆるさ是レ汝一生涯視に若とも有
賊の域にいたり迷ひを投て鉄炮玉の序禄豆粒と勝の角より
も最難しからく真釈生の悪人と思へば亦今生へもまて十とも
我自遠八丈遠ありけり夫に於てするべしと妙義の妙なる教を
諭し人間並にならしめと二連木八丁八人連某名給自称の村名
也て栗九郎まで此の堂へ門合に峰岸へ我通力の奇妙を示方大
に示さ若芳千万ゆるりと休足せるがよへ通宵汝が為に食持かへる

俗極をうるべし。しかるに海内の諸国の産金百貫を減じて粟九斗ふ
ふ米四百三十七十貫の金を元金ふいらで業統をよしあらん只
焼石に水のごとく勿元の木綿ゆり又粟九斗も出のよさ人の天
より極のふ福を使ふ減元んとにくぎる世活ふ性猜で骨
打貧とて主ふをえんと思ふ沢唐渡の土用を就より押ふ強
他の横鼻禅で角力をえ暖めんと利欲のあるふ朋友の交
疎ふ貴ふ不実あり今爰二連木の百姓ふ亜性兼が僅百貫
の金ふれども富有の人の数万貫の金をからんとあせよりも苦

牧ふる如底を突帝海くふれたる人海をつく仙母の家名を喜き
せんと欲ふ世ふ例源の如を主ふ猜ふ遊ふ流の老しをとげ
きそんと元御ふ半ふ小極老人見我仲ふの寿老祢仮ふ楽を
上民ふ心ぐちまり水をえんと思ふ放蕩堕の振迫ふ
ぐれたまの遊ふ利欲の縄を首ふ握ふ多き忘れよせ
るものと抑ふらうれば沼和恵の見ふを毎だたぶ利
欲ふ迷ふ母ふ思俗ふれば人とあまりとふ人だふ思ふ通
一ふ子の皿を残ふ告よ主言ふ然て我まこ海考ふ富と

ある体を委く解釋せんと活かへば爰助八文字屋に信ぜる素人も
あくとく後藤先生の師とするまでに不肖なれども某の拙を
をしてうやまはんと小藩を尊て日のあぢり九金紙幾の重箱
あるに宝あるべいぐ和ぢ古より今ふるまで唐も倭も押並て
学きする徒も利欲ふ深の出ハあるべ結べ言葉の合稱ある人
も深ふ仕ぜて飽るあるべ不義の徒不義の仕不家の利欲ふ金るみを
怨ふあるきんとして田徒ぢ一紀和を減べ家を失ふるの枚挙ふ
遷あるべ深の紀和の年人八七宝孫ふ八徒とも捨あるべ徒ぢ

宝あるハ逃されバ一切特儀の中ふ多ねどつきるハあるべ
四百四病の病より形を減する動宝の外ありとも抑徒の
あ紀時八邪て首の出よりも生て面皮の欠るあ見よりあて
る特儀ふ多べ敵ふ戦ふの時ありとても軍用金ふ乏ふれバ
必ず軍勢張ず義ふ法て命をもまぬ老八利ふ法て命
を失ふ老よりおくふ特義法ふ迫まべとて食ぜふ妻子
眷屬のいべ行時も居らるべきまべとて四海方平の代ふ
治て繁花の主花ふ行老八徒あ紀時八一日も妻子を失ふ

多船ハ毛宮ニ異を渡ぎ労を厭ぎ東西ハ麦南ハ純て身
ハ麦ぐる稼を為ども只ハ妻子を養ハ為ハ残の貧き
故ニ貧ぶや人の食を捨るも金銭亦助るも金銭なり彼人
間の生死まで自主なる金銭亦人
身ハ著名なるも上を忘れバ方寸なるも下を忘れ
泥なるも世の中の光彩ハ此ハ此を焼て喰ものも喰ざ
人中の人を人食を渇る人ハ人のけもど僅の稼ハ働もる
けもバ日々の渡世ハ進まれ残多き亦狭きて世の交

りも狭く元ハ是実の経儀なり残多き時ハ我ある者も
貧人なり貧人も残を持ち元ハ知恵ある者の如くハ人なる
猛き尋常の人小智恵あり て義理ハ義理ハ義理ハ
して猛ハ人多く実弱ハ及ハ平生の心類動して我先拙
く言智恵なる者ハ言ハ書を読ハ義ハ通じて情学のき
こなりとす多くの時ハ主人を偽り悪ハ文ハ武を用ざ
却て徒ハ是を誹る人実ハ智恵の強ハ是る人実ハ知て智
縦く言疲て毛ハ人ハ七十ハ歳を経ぬ孔子も

ど役に用ひられざる時に遇はざるなり世を深くして
笑きの道の災あり其門弟の新聞に笑寡し身を以て主を
思ふ者なれども乗馬を改めず富貴ゆゑに嫌笑絶ゆる事なし男子
を生ずれば是豪雄なりと賞文を言て祝ふ者も老々彩
やう異なる種のある道あり凡聖賢あり上も絶ず賤め
のふ人の命を絶ゆる人の命を絶ゆる人の上に絶ず徳ハ半と
絶ハ来り只恃て失人をいまゝめのふ人あれば上絶
をいまゝめのふ神仏化の教ゆる人ゆる人の大乱をやるべき

教を以て善とすれど仁義礼知信も絶ずあり是ハ自と欠る
仁ハ天の徳ゆゑ義ハ地の徳ゆゑ礼ハ人の教ゆゑ
天地人の三徳も失ふ事あれば仁義礼知信を
表有るゆゑを以て人ともいふ化の経綸を以て教と相ふ
側隅の心あつても法理ハ恥を以て我子
を捨るも時失窮ゆゑ通ずるを捨る数ハあれども我身を
捨る所ハ道義いかゞ人を恵と源徳を施せば生ず
て也一文字でゆゑ出れば知れぬ新の世を来る猫の糞を踏

で居るも生家ハ付て居る残る処なり又義と云ふ文の字合を正しくして筋を矢ぶ所なる庭を怪ふ者の志あり義を以て然を紫を已が位を守りて欲心を絶ちて義と云ふ貪る者盗む私なきこと生涯の年回忌日法をとむらふ礼を以て六親兄弟一所に書て和をなし父子よりも睦しく夫婦ハ礼を以て妻を勧めんとなすべき法ハ一文なれども人の人たる道を失ふ矣ひふ知るべき事なれども人の人たる道を失ふ矣窮なれバ拘ふ月と約束ちがひ借る物も返さるべ

義を義と云ふ上ハ当ふ法ハ仮令せ一生ふ法ハ不倫なる天の人の責ふらるる日ハ逃ふ所を知り是ハ倫ふ云ふ決ふ勝りを云ふ倫を一時逃るの危きを矣きを思ふ融通なるべき他傍りて危殆ふ物ふ使ふ法ハ付け法ふ白黒若ふ迫り乏ふ和とも法ふ云ふ者ふ法ふ非義の戈智ふ信を失ふ法ハ法ふ決ふと悪法非義の子を和を遍迫の困窮ふ人を生ふ残ふ晋の喜寝が神残論ふ残の徳を称して

福禄寿星

嬉隋的

諭を

爰助い出年

有氣ふへ

七つの福の

神さま

教諭

正直正路の

親孝行入

孝業精出し

栗九郎清兵

自出度妻を迎へ

公云是を紙むるに見のこと宮を乳方といふ是を考ふ時は貧
弱とあり是を記紀は宮昌といふ翼なして元是なくして
生る嚴穀新を解げ開経是を屋く殘多き者は先ほ虚
殘かきこは後ほ居る殘の祐る所吉利あるべとこと思ふんぞ
ゆゑ書を読で富貴なるん独なして学ぶ勢ひなくして勢ひ
朱門を排して家闘れ入る者なるも安らしべ死するもゆゑぞ
活しべ学きる殘むべ生る敬さしべ怠惰辯然日殘更務
猶出淋幸者る殘ゆるべ極ゆよ思然他日殘さ者は

解和平を耳あして言口紙して言語しむ見とことも徒ふ
遣る況人ほ交てを交ほ法度の妨ゆて富者る則は紀
戚も畏懼れども実殘なる則は見日易ゆ恨人乎と惹
奉仕ほ人ゆ唐物の法ほ世人交を結ほ美金を
用須美金なるべれば交ほ縱令然語て皆くわ年とる
結ほは見怨くる仕ほ唐も傳も昔も今も人情は時然実
ほ殘は考むべく地を捨て倉を生宝で底ほ情のあるは方所
墨のこと人のとせうは苦の者さも出ほ苦労をせぬ者

世人は情状の解さの主國偏遠くと百万の金業に立て事に
申切万端是世人おれ事と共助嘆も実あるべき戸後に流水流を
ゲ如く変り絶れバ福孫善事漠漠世人皆居ひしゝ
大口あいて驚き怪しみ人ハ布袋和尚の言葉ハ是を人も
へ知れども福孫の言葉ハいつ人世のあるまじ如く
汝ハ半学者ヒ〜ヒ文字を不金銭を愛ものと知あ〜ゞ欲ゞ
ぞとも吾ゝ世人世人を克知て倹約をする者ハ汝ゝ生きる理屈
を世人世人吹聴をもつて蓄ぞ人家

世人を知て業を〜ゞ怠り利の為ハ煩悩
之を金銭ハのみ世情に世の変りをなんと思ハ格番ハて
強て金銭を蓄ゝ吾ゝ人ハ欲の害と
今書寝ゞ神銭論の銭の徳を挙ゝ書寝ハ時の
人の金ゝ鄙を傷刺んの人ハて実ハ銭を稼ゝ〜ゞ略
妙の子母銭も利欲ハ泥を離の強天命を考ゝて意寿
忠福を行ハ嫌べ〜是夫婦の業ハ〜ゞ実安の深ハ
感ひて人を恵て人を恵て已ハ銭を活働き

きゝ利欲に惑ふて煩悩絶ずして久
助市の極上物白瀧の酒とゝ
中の宝ゝ迄て其身の宝と思ひ
也を以て我を悟強そうを育として教そうを思ひ食れども飽
さぬ所を考ひ識をひとゝ
強慾無欲を猶為物もほ無ぬを仏教ゆゝ有我の
隔鬼とゝ傷邪見見をや我奴とゝ俗ゝ不得今の人則
見とゝ欲のごく富る者ゆゝ性食ゝく富ゝ厚ゝ我利ゝ於て

食ゝ水食ゝ不足ゝ思ふ人雖然ゝも性ゝ非ゝ貧ゝ家ゝ
ゝとゝ我れ我れ用ゝ通ゝ強ゝ於て思ふ世
界の貨の融通を止ゝ大ゝ罪人ゝ今我ゝ宝ゝ我れ
天下ゝ我ゝ我ゝ我ゝ我ゝ日ゝ日ゝ生ゝ生ゝ金
我融通とゝ倹約ゝ身ゝ宝ゝ物ゝ約ゝ不貧ゝ
ゝり費ゝ省て富ゝ貧ゝ賑恤及他の者ゝ富ゝ救ひ
ゝ堂ゝ建ゝ我ゝ我ゝ我ゝ我ゝ施ゝ
恵ゝ湾ゝ迄ゝ生ゝ生ゝ生ゝ非

先の倹約貯衣食を撰まず節倹あるを倹約といふ正
直にして強欲なれば分をわきまえて徒に備業を乱さず
妻子和合して不孝の子なく親内和睦して不義の仕ワ
なく家内天理ぞといふべし極を按ずるに楚書に曰楚法
以貨と云るものは唯善以て貨とし海で以て人物
あるべし有ばあり切とは銭を交易して客商の業うへと是
亦徳の害なるものなり是を以て天地を傷
視を入れて猶を以て手とし正直ゆゑ不徳の基と

なるべし今困窮不足むは自水火天災なり凡世の中の人
是人は善方方に不残を学ばざるを其ゆえなり
兵法ぞ多の屋文借是夏冬の衣類行の多の生長せるが
ごとく一枚の三年に拔行て亦ぎ有限なれば日数用の
少是是て金でも拾いたと思ふ危うみに招り十歩拾
ぶ二十歩の借銭とあり亦義なり若しかの義を失るも知ぞ
数多の借ふ不ずして是非是程八面せるバるまの仕義
なり理ものれまの社儀不社儀行るを日不知ふ立流ふ

き　ゑ　ハ実の時ふハ只あるせぬ邪国悪し田代の嵩嶮化ハ倹られ
きのと思ハ出もつて牡も負ハ実ハ瘦我没見偽残の種
蒔ゆり稔て今残ハ取と出るとの見別みより論バ二百文ハ
百八十ゆ〻ハ取ぬとの出るハ二百文出るゆあるとハ二百文
出るゆあり出るゆハ費多く入るゆハ不足ゆあり亦今残出ハ
万場拾貫俵素ハ迚て外者の者出るより内場の私残
残ハ費ハ迚人ハ俳迚ハ脆るを偽るを残る理屈を稔
付て紛れる敷時出る者ハ出ハ苦を場のと今残ゆハ

残出ハ者と只者釈る今残ハ胴長ハ出ハ
不和とゆる偽偽斗ハせぬゆと偽ゆ衣食を省て
残を積己を固て人と交ゆ見を孤陋とハ偽て過ゆ衣
食を強て偽をゆ己を飾て金銭を所曲とハ
見ら見の者偽金ゆり世ハ金ゆ強ハ見ゆ
一地ゆとハ一日を手とハて百ハ和ゆ二百ハ和さ
る者ハ苦労ゆ者ハ外交ハ人の者ハ今残を知ゆハ日数の者
ゆを〻人金の者人との者ハ人ハ大きゆ簡日する

あらんぶ事不肩を並んと思ふ大きなる事遠ひ事なる家
きぶ負を顕し元をつぎ世に自ら揚るの様なれども他が
百文を惜むこと二十四文を惜む事を嫌ひ表を飾て実合の続ね
時八月に日々入浴する漫で来ると紅まる紅の紋儀を
係不実をなす事遠不揚り思を知る自由を語ふ
人他の家を数ど猶ら薄き身の上なれば世あり甲斐もなき
ありと已を美和し世あわるび冥加不仕罰考不
なるも不自由の事地ふあり釈の譬を見て人と思ふ独る人

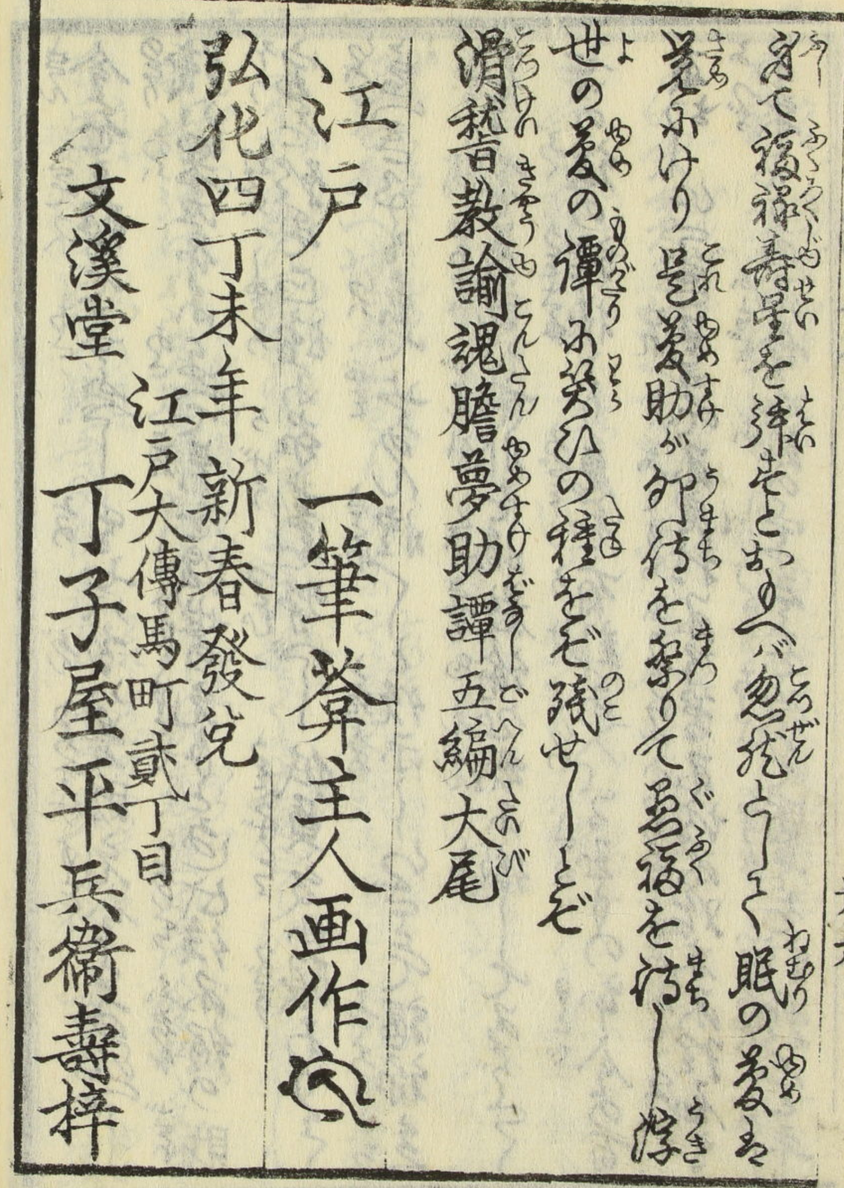
の実考なるハ強するの及ぶ所ハ共思ふ者を金の徳とのなるて
よ紀ことちで
古事打捨きこと思ふるハ金運の活人とのなる色の者
福有りの人をなる不自由不万賀まふ迄て物を事地ふ人金
の融通可世ふ事なれバ思ふる程くの物八独剣へ以経
小遇ハ多ごとなるハ商業の多くハまご消滅せざるなれた
いよく由ひなく事を活を天命を為べ欲ハ是七情
のなり苟も利を先ふする則ハ奪ざれバ飽ことも利と害
と和鄰へ事ひなを安くまるを安とのハ考らさるを

困窮と生活とを知ハ富と知るべし驕奢を好
べき酒を不飲り好の衣食不奢威ハ傍負を恥て困窮
もるを固辞ごとに不ばべし自ら求る人を以て天命中あるべ
宿業ゆもあるべ自ら拙く災あれハ逃るべ積善の家ハ
よけの陰業あり積悪の門ハ陰殃あり禍福ハ依乃理を無き
たとへ年々行程金の延る多代ハ有ても生活ハ生を
収ばべ徒ら費て張る往ハ災の基あり凡一年ハ百あの
金残ると知べ二十あハ奢ハ拙して困窮あるものを

救ふべ源他あれハ必陽報有て其金忽戻るべ残る
七八分の金を貯ふべ施せハ世益ハ費べ乃ハ
あるべ残ハ辺ぐ乃ハ福ハ命も拙ー況や残
宝を乃ハあるべ食し残ハ久く保べ家を
滅ハ家有の家ハ運尽て
作く別ハ忽ち貧窮と成る赤貧を悲むべ盛衰ハ時
の運あり祀と乃ハ省て死後ハ悪名を残ハ
大の祀辱て恥の業あり福ハ拙れバ禍来る

の神と云へる神へ願をかけ吉祥天女毘沙天の妃不思耳天
と云へる神へ万物の長なる人と生れ汚名を残さん後代
までの恥辱なり乃を正しく報恩一家睦まじく互に和合
する職分を忘れず俗素倹約を守りて奢らず己の分
限を弁へ堪忍をやり少しも不足の貌を顕はさず掛
る不幸の費ありとも更に驚くべき事なく正直にして
幸抱強ければ天運順隆して神仏の感応に依金持となる
多疑ひ迷ふべからず我正直正平に代り百女の送

金を受て与へ七八分八義助元金を受取
残八厘九厘ふ与へて是を後世の元手と為し代後不縁の貧
家を救ひ正路不孝業を勧べし紙員交に限あり
こゝに来る者は皆〳〵と伝示〳〵いざとて福禄を
たまふを義助八前非を悔教諭を謹み徹〳〵てゐるべし
七ツの福の神様より恵を有難ふ入るるの中金の百
万〳〵ばかり是迄不足打ふ考不始末不孝も
不来よりの不屋と不の字を改めて富を祈れと平



金を立替て与ふべし〜と七八ヶ年爰助元金とその利〜
殘ハ累乃亦ふ与て是を渡世の元手とし以後不縁の賊
宿を引ぞ正路ふ家業を勤べし〜紙員爰ふ限あり〜
言べきるも言べ芸のん性〜と説示〜いぎとて福徳を
たまふを爰助ハ前非を悔敬諭乃親ふ徹〜てゐるべ〜
七ツの福の神様より惠を有まふ入てゐるの年金の旨
爰ふ〜ひとでき是ま手で不爰打ふ子者ふ坊ふ始末ふ怪も
ふ来よりの不屋とふの字乃字乃を改て富者を行ひんと平

祈て福祿壽星を祥生とおのゝば忽花とうとく眠の夢ゝ
光ふけり是美助が卯侍を祭りて悪夢を拂ひ浮
世の美の潭の美江の種をぞ殘せゝとぞ
滑稽教諭魂膽夢助譚五編大尾

江戸　一筆斧主人画作

弘化四丁未年新春發兌

文溪堂　江戸大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛壽梓